慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	新しいラディカリズム、あるいはイデオロギーの復活?
Sub Title	A new radicalism : or the revival of ideology?
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1968
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.41, No.5 (1968. 5) ,p.215- 235
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	法学部政治学科開設七十周年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19680515-0215

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新しいラディカリズム、あるいはイデオロギーの復活？

奈良和重

一

今世紀アメリカの「二〇年代は戯れであつた。そして三〇年代は深刻な状態のなかで昂ぶつていた。五〇年代はそれに較べると随分燻んでいるようにみえる」[1]と、グレンヴィル・ヒックスは述べている。同様に、ダニエル・ベルはつぎの如く述べる、「二〇年代の作家たちは……ブルジョワ的慣習を軽蔑していた。三〇年代のラディカルズは《資本主義》と闘争し、後にはファシズムと、そしてしばしの間スターリン主義と闘争した。今日では思想的にも感情的にも、われわれが闘争できる敵とは一体誰か？　このパラドックスは、世代は《英雄的》生活を生きたいと思うが、そのイメージは本当は《ドン・キホーテ的》であることを悟るということだ。このことは、セルヴァンテスの騎士にとつてと同じく、時代の終焉である。すべての知識人にとつてと同様、若い世代にとつてもこのような行き詰りが存在している。それはイデオロギーの終焉をみた時代の部分をなすものなのだ[2]」と。

《欠如した世代》[3]、なにかそのような落魄たる思想的ムードが、現代のアメリカ知識人たちの間にある一般的傾向である。「イデオロギーなき政治とは、たとえどのようなものであれ、いささか倦怠なものとなる傾向がある」[4]。しかしながら、この「イデオロギーの終焉」と対比して、五〇年代、そして六〇年代にはアメリカ社会にラディカリズムが復帰あるいは復活しつつあるとも言われる[5]。『パーティザン・レヴュー』誌および『ディセント』誌と抱合して、群がり立つている思想家たち、彼らの《新しいラディカリズム》は若い世代のイデオロギーなのであろうか？「世代とは衣裳の問題である。世代の存在は《外観》によつて立証される。この《外観》の一部分は、修辞学的扮装であり、諸理念や成句の混合であり、それによつて各世代は、知的特性の幻影を作りだす[6]」。ここでは、このようなラディカリズムの衣裳に一瞥を投げかけてみたい。

(1) Granville Hicks, "Liberalism in the Fifties," *American Scholar*, vol. 25, no. 2, Spring, 1956. p. 295.
(2) Daniel Bell, *The End of Ideology*, The Free Press of Glencoe, Ill., 1960, p. 288.
(3) ハロルド・ローゼンバーク『新しいものの伝統』東野芳明・中屋健一訳（紀伊国屋書店）二五六頁。
(4) Christpher Larsh, *The New Radicalism in America (1889–1963)*, New York, Alfred A. Knopf, 1965, p. 333.
(5) Martin B. Duberman, "The Fire This Time," *Partisan Review*, vol. 32. no. 2, Winter, 1965, p. 147. Irving Howe, *Steady Work; Essays in the Politics of Democratic Radicalism*, New York, Harcourt, Brace & World, 1966, p. 9.
(6) ローゼンバーク、前掲書、二四九頁。

二

一九二〇年代半ばのアメリカ社会には、知識人による社会批判に三つの次元での疎外があらわれていた[1]。第一は農村共同体の生活に対する嫌悪、第二はビジネス文明への反抗、そして第三はもつともペシミスティックな、T・S・エリオットの『荒地』の世界にみられるような一切の希望の拒否がそれであつた。同時代のアメリカは、改革者たちの、過去の社会主義者たちの狂おしい夢想を現実化し、無限の未来を約束されているかに思われた。高賃銀、高利潤、そして贅沢と余暇、アメ

リカはますます富裕になり平和になるというさながら薔薇色の映像の如く――だが知識人はこの悦ばしき合唱に参加するどころか、それ故に思い乱れていた。「彼らの大多数は繁栄がつづき、増大してゆくであろうという一般的な意見を受け容れていた。しかし彼らが沈滞した、憂鬱なものと考えていたのはまさにこの繁栄した社会なのであつた」[2]。ルイス・クローネンバーガーが言うように、一九二〇年代に開花した態度は、「アメリカ生活に対する軽蔑的な態度、アメリカ的俗物主義や地方的偏狭性を痛罵し、都会と文明化のアメリカ的欲求を嘆き悲しむ態度」[3]にほかならなかつたのである。

攻撃のためのスケープゴート、それがピューリタンであるか、ビジネスマンであるか、あるいはデモクラシー的平均人であるかはともかく、疎外された知識人が繰り返すテーマは、情緒的不毛さ、強制された同調性（コンフォーミティ）、過剰なモラリズム、商業主義、偽瞞的態度などであつた。しかしながら、彼らの状況の意識は、政治に対するプロテストというよりむしろ、政治のラディカルな拒絶であつて、その発想は詩的、文学的なものであつた。「二〇年代のまばゆい芸術的豊饒さには三〇年代のまばゆい政治的豊饒さがつづく」[4]ことになるが、その豊饒さは進歩のオプティミズムではなく、芸術のペシミズムに彩られていたのだ。例えばヴァン・ウィック・ブルックスのつぎの言葉はこのことを明白に告げていよう。「もしもわれわれが、例えばドライザー氏にほかの何ものをも負うていないとしても、アメリカ生活の……荒廃と無益さについての悲劇的感覚に多くのものを負うているであろう」[5]。そして、「雑草と野生の花ばな！　美しさも香りもなき雑草と、真昼の熱に生きのびられない野生の花ばな」[6]。

ジャック・バルザンの言う「マルクス主義的三〇年代」[7]、あるいはいわゆる「レッド・ディケイド」はまさに資本主義の危機感が生ま生ましく漂つている。一九三〇年代のアメリカ社会には幾百万の人びとが絶望し、饑餓に苦しみ、もはや希望を喪失していた。「社会は病み、そして非人間的であつた。イデオロギーについて無頓着な人びとでさえも、深刻な社会的および道徳的変化への欲求を抱いていたのである」[8]。一九二九年に始まる大恐慌を知識人たちはどのように受けとめたか？

エドマンド・ウィルソンにとつては、「まるで地上が最後の審判の日のために準備をととのえているように」思われたとしても、けつして誇張した表現ではない。彼はつぎのように書き記している。

……暗闇が降りてきたようであつた。にもかかわらず、わたしの世代の作家や芸術家たち――彼らはビッグ・ビジネス時代に育ちその野蛮行為を、彼らが関心を抱く一切のものをビッグ・ビジネスが押しのけることを常に憤つてきた――にとつては、これらの年月は陰鬱であるどころか、刺戟的であつた。あの愚かな巨大な偽瞞の、突如とした予期せざる崩壊に爽かな気分にならざるを得なかつた。それはわれわれに新しい自由の感覚をあたえた。……ホワイト・ハウスにいるビジネスマンの大統領、彼がわれわれに向つて何かを告げる時には、体制はまつたく健全だと言いつづけてきたのだが、その彼とともに、われわれは共和主義的なアメリカ制度の存続を疑い、そしてソヴェト連邦の実績にますます印象を受けるようになつた(9)……。

知的反抗と社会的ラディカリズムは相寄るようになつた。文学的な批判的知識人はマルクス主義へ転向した。ラディカル、あるいはリベラルは今やコミュニストと同義的にさえなつた。むろん三〇年代の知識人の大量転向はアメリカにのみ特有なことではなく、国際的にはファシズムの高まりとともに、ペシミズムの重たげな陰翳をひきずりながら、当時の知識人は渾沌たる岐路にたたずんでいた。コミュニズムは彼らに一箇の信念を提供したわけではないが、しかし「良心の痛み」というものを提供したのであつた(10)。共産党への参加はまた彼らが「社会的孤独感から逃走しようとした最後の努力(11)」でもあつた。ともかく、この疎遠なイデオロギーが何故にアメリカの知識人にかくもプレステイジを得たかは、先に引用したウィルソンの言葉が正直に語つている。さらにヘンリー・メイの説明を付け加えるならば、マルクス主義こそアメリカ資本主義社会に対する完全な、仮借なき弾劾を提供したからだ。その《科学的》社会主義の世界観は、すでに理想主義の魅力が色褪せつつあつた時に、甘美なセンチメンタルではなく、非情な思想体系として映じた。さらにマルクス主義は、その非情さにもかかわらず、全人格的な自己犠牲を要求する。いわゆる《ブルジョワ的個人主義》に代つてプロレタリア大衆という《未来の波》に人びとをコミットさせるのである(12)。かくして、「共産主義者はインテリの世界で場をあたえられ(13)」、まさに三〇年代は

《マルキスト》[14]世代として盛大を極めたのであつた。

ところが、共産党は知識人が知識人であるがゆえに彼らを欲したのであつて、知識人として彼らを欲したわけではなかつた。[15] 彼らのたまゆらの情熱は、たちまちにして「イノセンスの喪失」を招く。ベルは三〇年代の知識人を生家に帰つてきた放蕩児にたとえる。「《道徳的》かつ《責任をもた》ねばならぬことを知る世代は、生家にとどまることを運命づけられている世代なのだ」と。[16] 三〇年代のアメリカの顕著な体験であるイノセンスの喪失ということ、これを理解するのは放蕩児と共産主義者の運命を理解することによつてのみ可能である。[17] われわれはここで、彼らの悲劇的な物語を述べることが目的ではない。ラインホルド・ニーバーがその「リベラルズとマルクス主義的異端」のなかで回想するところを読めば充分であろう。[18] 幻想から幻滅へ――スターリン主義の現実は、モスクワ裁判、独ソ不可侵条約、スペイン内戦での共産主義者の奸計、党の官僚制、絶対的服従であつた。如何にアメリカ文明に批判的な知識人であつても、みずからの生存を意識せしめずにおかなかつたとしても当然である。

「マルクス主義におけるヒューマニズム的諸要素は排除された。そしてその代りにマルクスの思想の、未来はかくあらねばならないことを知ろうと主張するヘーゲル的な倨傲(ヒュブリス)によつて、甚だしく堕落させられた側面が強調された」。[19] ベルの言葉をつづけよう。「結局、この世代は挫折したのだ。理想主義的な衝動が消尽してしまつたからではない。これは恐らく、どのようなラディカルな世代であれ不可避的な軌道である。現実の事態が予測を裏切つたからでもない。これは一層健全なるアメリカの姿である。この世代がひと時の間、最後のラディカルな世代――それが権力を味わい、かつ堕落した最初のものであつたゆえに最後の――であつたと言つてよかろうからだ。(しかも権力は堕落するというだけのことではない。アレクス・コンフォートがかつて言つたように、堕落した人間は権力を求めるものである。)しかも堕落の種子は《取憑かれた者》の倨傲(ヒュブリス)なのであつた。[20]」と。このところに、われわれは思想の深い傷痕と、それをとどめた精神の曲折を認めざるを得ない。

指定された知的な残虐行為、[21]それを敢えて行わしめるのは「スパイし、通報し、裏切り、そして追放し――つまり、闘争の反知性主義的目標を知性主義化する」[22]ような絶望的な論理とシニカルな道徳でなくてなんであろう。三〇年代の放蕩児は「やましい過去」を負つたのだ。アメリカの現実は彼が予想していた程破滅的ではなかつた。破滅への途を歩んだのは共産主義の現実そのものであつた。彼が歩みきたつた過去の墓碑銘には、疎外された（alienated）、疎遠された（estranged）、踏み迷つた（astray）、混乱（confusion）、困惑（bewilderment）、絶望（despair）、恐怖（fear）といつた文字が刻まれるであろう。それらは今日にいたるも依然として知識人の情緒に訴えているものであるからだ。しかしながら、H・L・メンケン、E・ヘミングウェイにはじまり、ジョン・ドス・パソス、ラインホルド・ニーバー、ライオネル・トリリング、エドマンド・ウィルソン、レズリー・フィードラーなど、さらに現在もなお活躍している多数の人びとをも含めて、この世代はもつとも華々しき衣裳をまとつたラディカルな知識人たちの群生した時期であつたことは確かである。

(1) Henry May, The Discontent of the Intellectuals: A Problem of The Twenties, Charles Sellers ed., *The Berkeley Series in American History*, Chicago, Rand McNally & Co., 1963, p. 24.

(2) Ibid., p. 30.

(3) Louis Kronenberger, "Our Country and Our Culture: A Symposium (II)," *Partisan Review*, vol. XIX, no. 4, July-August,1952, pp. 439-440.

(4) Arthur Schlesinger Jr., "Our Country and Our Culture: A Symposium (III)," *Partisan Review*, vol. XIX, no. 5, September-October, 1952, p. 591.

(5) May, op. cit., p. 42 の引用によるもの。

(6) Ibid., p. 34 の引用によるもの。

(7) Jaques Barzun, "Our Country and Our Culture:A Symposium (II)," op. cit., p. 425.

(8) Irving Howe, *Steady Work: Essays in Politics of Democratic Radicalism*, New York, p. 359. アーヴィング・ハウはまたつぎの如く述べている。「三十年代には、ニュー・ヨークは政治と論争とに縁どられた、それ以来ひとつの感傷的な伝説となつている生命のみなぎるメトロポリスだけではなかつた。それは同時に、残酷な、醜悪な、戦慄すべき、悪臭を放つジアングルであつた。――ニュー・ヨークは、ユダア系移民

の家庭で育つたすべての少年が、それを意識するかしないかはともかく、疑惑をもつて眺めるよう教えられてきた疎遠な世界の具現化したものであつた」。(Ibid., pp. 350-351.)

(9) Irving Howe and Lewis Coser, *The American Communist Party: A Critical History*, 1919-1957, Boston, Beacon Press, 1957, p. 279 の引用によるもの。

(10) ステファン・スペンダー『創造的要素』深瀬基寛・村上至孝訳(筑摩書房)第二部七五頁。

(11) ジュディス・シュクラール『ユートピア以後』奈良和重訳(紀伊国屋書店)一二九頁。

(12) May, op. cit., p. 49.

(13) ダニエル・ベル「アメリカ政治の諸解釈」同編『保守と反動』斎藤真・泉昌一訳(みすず書房)二五頁。

(14) ローゼンバーク、前掲書、二五九頁。

(15) Howe and Coser, op. cit., p. 284.

(16) Bell, op. cit., p. 289.

(17) Ibid., p. 290.

(18) Reinhold Niebuhr, "Liberals and Marxist Heresy," George de Huzar ed., *The Intellectuals: A Controversial Portrait*, The Free Press of Glencoe, Ill., 1960, pp. 302-307.

(19) Howe and Coser, op. cit., p. 546.

(20) Bell, op. cit., p. 291.

(21) ローゼンバークは書いている。「この俗物どもは、歴史の舞台の上に自分自身を発見することに半狂乱になつて、片方の目で未来の国際的権力のなかのポストを、もう一方の目で現在の政府とか、大学とか、ハリウッドとか、出版界のよいポストとかを見つめながら、指定された知的な残虐行為を熱心に遂行した」(同、前掲書、二四五頁)。これはむろんコミュニストについての皮肉なカリカチュールではない。

(22) ジャック・バルザン『知性の運命』本多顕彰訳(紀伊国屋書店)一五二頁。

三

《非情なラディカリズム》――政治への直接的なかかわり合いの効力に対する誇張された信念というものをともなつた――そのようなラディカルな態度への反動は、政治に対する誇張された懐疑主義という形態をとつてあらわれる。[1] 四〇年代にお

ける『ポリティックス』誌の懊悩は、ラディカルな知識人を象徴的に――けつして典型的ではないが――[2]示している。ドワイト・マクドナルドは一九四四年『ポリティックス』誌を創刊したが、四九年にはそれは廃刊された。ソヴェトの礼讃者であつた彼は、モスクワ裁判に絶望してスターリン主義を放棄した。爾後しばらくはトロツキストとして指導的役割を演じていた。だが四〇年代には次第にマルクス主義を離れ去つて、平和主義者として再生する。かくして、「……マクドナルドは『ポリティックス』誌を放棄して、『ニュー・ヨーカー』誌のもつと優雅な草原に振り向いた」[3]。ラディカルな知識人としてより、ポピュラーな作家の方が一層成功したわけであろう[4]。

『ポリティックス』誌の唯一のテーマは「人間性喪失」、「非人間化」(depersonalization)である[5]。マクドナルドの脳裡に徘徊しているのは、全体主義的政治に辱められた二十世紀の人間の妖怪である。かかる意識は、「政治についての奇妙なイノセンス」に起因している。そして彼のイノセンスからの堕落は、暴力――それは支配衝動というものの人間に内在する一種の願望のあらわれなのだが――に対する悲劇的な認識、近代の大衆社会、それは明らかにハンナ・アーレントの『全体主義の起源』の影響を受けて、暴力を喚起もしくは抑制する官僚化された機構装置に対する戦慄すべき認識にきざしたものだ。もちろんそれは誤つた認識ではないのだが、「イノセンスに対する告発はラディカリズムにも同様に向けられ得たればこそ、政治――そして『ポリティックス』誌――は終焉してしまわねばならなかつた」[6]。したがつて、クリストファー・ラーシュも適切に指摘する通り、「マルクス主義、ついで平和主義を使い果して、彼はみずからの《イデオロギーの終焉》に到達した」[7]ことになる。これが四〇年代のある知識人のラディカリズムからの惨めな逃走の姿なのだ。

一九五〇年代は冷戦の持続、社会的繁栄、左翼的ラディカリズムの一般的な退潮とマッカーシィズムの抬頭、われわれはつい先頃の凄しい記憶が去りやらぬままである。だが重大な問題は、知識人自身にみられる変化である。「一九一四年から一八年の戦争以来はじめて、アメリカの知識人たちは自国の文化に編み入れられたいという欲望に動機づけられている」[8]――

放蕩児！　彼らは以前にもまして政府、官僚機構、企業体、大学、そして大衆文化（mass culture）そのものに迎え入れられた。「アメリカ知識人と商業社会とのシステマティックな和解を伴った、《アメリカの祝福》がそのクライマックスに到達した」[9]と言われるゆえんである。知識人のブルジョワ化[10]、彼らの屈辱的な裏切り（セリング・アウト）、知性的な《売春》[11]、こうした非難に曝されることは彼らの栄誉かも知れない。「イギリスで“Establishment”と呼ばれている種類の、凝結した影響力のある知識人の構成体というものを、われわれは多分はじめてアメリカにおいて所有しはじめている」[12]というアーヴィング・ハウの口吻には、あからさまな憎悪がこめられている。ともかく、今や「知性がそれ自体一種の権力たることを容認された」[13]こと、と同時に「知性は権力、もしくは特権の一形態として恨まれている」[14]ことは紛れもない事実である。

インテレクチュアルな Establishment――それはむろん俄かに設立されたものでなく、ニュー・ディール改革期に起源を有する。このことが直接に、思想としての保守主義イデオロギーを生みだすわけではない。しかし五〇年代のいわゆる反知性主義とかマッカーシィズムとは関係なく、アメリカの知識人たち――とりわけ大学という出来あがつたエスタブリッシュメントにおける教授たち――の指導的な思想傾向のうちに、ひとつの巧緻な「保守的ムード」ともいうべきものが存在している。ウィリアム・ニューマンがその著『無益な社会』で分析しているのは、かかる種類の――彼自身の表現によれば、「保守主義のカール・マルクスの類い」である。ラッセル・カークをはじめ、クリントン・ロシター、ダニエル・ブースチン、ルイ・ハーツ、ウォルター・リップマンなど、彼らは「保守主義を近代化しようと試みる」イデオローグという烙印を押される[15]。新保守主義と呼ばれる歴史家たち、彼らがニューマンの攻撃を飾り立てているけれども、「一九五〇年代は……アメリカの過去を再考し、アメリカの本質を再発見しようとするひと時であつた」[16]という指摘は正鵠を得ている。批判の鋭鋒は「ダニエル・ベルとイデオロギーの終焉」に向けられるのは当然である。

ここには、「アンチ・イデオロギーのイデオロギー」というような新鮮さを欠く言葉の反覆を聞かされるだけの、うつけ

た内容のほかまつたく無い。だが実際に、うつけた内容とは「無益な社会」化したアメリカ自体であつて、ラディカルズの蹋蹐した生命力のない態度にほかならない。「わたしの隣人たちの大部分は一五年ないし二〇年前にそうであつたより遙かによい人だ……。確かに彼らは一層健康的である。彼らはよりよい食物をたべているし、医師や歯医者のサーヴィスに支払いできるし、現にそうしている。……彼らは聖者とか賢人になつたわけではないが、大部分はかつてより一層満足な、より有益な生活を送つている。……わたしは繁栄というものがよいものだ、と信ずるよう勇気づけられている」。[17] これは三〇年代『新しい大衆』（ニュー・マッセス）誌に健筆をふるつた当の人が楚々として述べる言葉なのだ。

アーヴィング・ハウは言う、「もつとも驚ろくべきことは、知識人の使命という理念全体――商業文明によつては恐らく実現不可能である諸価値へ捧げられた生活の理念――が次第にその魅惑を失つてしまつたことである」[18]と。政治あるいは文化に対する否定的関係が知識人の知識人としての使命であるとすれば、確かに知識人は機能停止したことになろう。知識人の背信 *la trahison des clercs*！大学における知識人はクレリックであるべきか、クリティックであるべきかはともかくとして、[19] 今日社会のなかで堅固に守られている知識人の終焉を告げる咆哮はかくも荒々しい。制度は知識人を知識人なるがゆえに必要とするのだが、知識人としてではない、という言葉が繰り返される。[20] こうして、《新しいラディカルズ》は先ず三〇年代の知識人の世代が今やアメリカの知的生活にその指導的地位を喪失しつつある危険をみてとり、イデオロギーの再生に息吹きをあたえようとしている。彼らこそベルのいう After-Born の世代である。

ナット・ヘントッフはつぎの如く言明している、「これらラディカルズは新しいのだ。そして彼らは質的にまつたく異つた――《敵》の本性の変化によつて、どのような従来の時代からもとりわけ異つた――時代のなかで行動しつつある。さらに彼らは、過去の失敗に対する情緒的な衣服（インヴェストメント）から自由の身だ。そのことが以前の世代――僅かの例外をのぞいて――の諸理念や分派的固定化を彼らには不適切である如く思わせているのである」[21]と。「われわれが闘争できる敵とは一体誰か？」

が不明瞭になつた時代に、新しいラディカルズが探し求める敵は、ほかならぬ『パーティザン・レヴュー』誌や『コンメンタリー』誌の思想家たち、例えばシドニイ・フックとかダニエル・ベル自身である。[22]「自己自身を《新しいラディカルズ》と考え、これら若き人びとは、古いラディカルズを追放することを彼らの重要な課題のひとつとみなしている。そして彼らは、古いラディカルズの間の意見の相違などについて厳密な区別をしようと心を傾けようとしない。三〇年代のかなり多数のラディカルズは疲れ果て、脱落し、あるいは幾つかの例では裏切つてしまつたことが、彼らには明確に思われている」。[23]《所与性》の限界内においてのみ機能するリベラルズは不充分である。所与性は人間の行動によつて変化させねばならず、福祉国家を《超越する》べく努力しなければならない。[24]彼らにとつてはまた、「ある種のアカデミックなラディカルのスノビズム」も堪え難きものである。[25]

かくして、新しいラディカリズム、五〇年代における『ディセント』誌が生じてきたのは、古いラディカリズムの崩壊というコンテクストにおいてである。[26]それは創刊号に明示されているように、「アメリカの政治的・思想的生活に浸透している順応主義の荒涼とした雰囲気に反対(ディセント)すること、多くの以前のラディカルズや社会主義者の側に現在ひじょうに顕著にみられる現状維持の支持に反対(ディセント)すること、新しい戦争が必然的であるか、もしくは不可避であるとする恐るべき前提に反対(ディセント)すること……」[27]を目的とする。かかる目的に対するベルの反批判も同様に手厳しい。「アメリカ社会の順応主義について、また《新しい思想》への必要性について『ディセント』誌は語つたけれども、ラディカリズムに関して新たに途を切り開くような思想は少しもなかつた。……だが何に対する挑戦なのか？　何についてラディカルなのか？……それ〔『ディセント』誌〕はラディカリズムによつて何を意味するのかけつして例証しなかつた。そしてそれは、とくに政治においては、何も新しいものを提供し得ない」。[28]ともかくわれわれは、このディセントのなかで中心的人物、もつともラディカルなアーヴィング・ハウの思想像をつぎに考察してみよう。

(1) Larsh, op. cit., p. 297.

(2) Ibid., p. 322.

(3) Bell, op. cit., p. 292.

(4) それ故に、五千部を上廻らなかつた『ポリティックス』誌の編集者としてよりも、三十万の読者層をもつ雑誌の作家としての方が一層成果があがるだろうと言つた皮肉がささやかれるのである (Larsh, op. cit., pp. 313-324)。

(5) Bell. op. cit., p. 293.

(6) Ibid., p. 294.

(7) Larsh, op. cit., p. 333.

(8) Edward A. Shils, *The Torment of Secrecy; The Background and Consequences of American Security Policies*, The Free Press of Glencoe, Ill., 1956, p. 134.

(9) Irving Howe, "Introduction," Howe ed., *The Radical Papers*, New York, Doubleday & Co., 1966, p. 2.

(10) Philip Rahv, "Our Country and Our Culture: A Symposium (I)," *The Partisan Review*, vol. XIX, no. 3. May-June, 1952, p. 306.

(11) Richard Hofstadler, Anti-Intellectualism in American Life, New York, Alfred A. Knopf, 1963, p. 419.

(12) Howe, *Steady Work*, pp. 5-6. 本書の最初の論文 "Radical Criticism and the American Intellectuals" は、"Radical Questions and the American Intellectuals" として『ベーティザン・レヴュー』誌第二十三巻第二号一九五六年春に掲載されたものである。

(13) Lionel Trilling, "Our Country and Our Culture, A Symposium (I)," p. 320.

(14) Hofstadler, op. cit., p. 34.

(15) William J. Newman, *The Futilitasion Society*, New York, George Braziller, 1961, p. 29.

(16) Ibid., p. 322.

(17) Hicks, op. cit., p. 291.

(18) Howe, *Steady Work*, p. 319.

(19) ジョン・W・ウォードが述べているように、「われわれを支持する社会が、われわれのかかわつているものに関して不快に思つても不思議ではないし、大学の主たる機能が古きものの保存であるか、新しきものの発見であるかどうか、大学における知識人はクレリックであるべきか、クリティックであるべきか、われわれは容易に言い得なくても不思議ではないのだ。」(John William Word, "Cleric or Critics?: The Intellectual in the University," *American Scholar*, vol. 35, no. 1, Winter, 1965-66, p. 113.

(20) Howe, *Steady Work*, p. 322. この表現はルイス・コーザーとの共著『アメリカ共産党』において、知識人と党との関係を述べたものとまつ

たく同じである（前節註（15）参照）。

(21) Howe, *Steady Work*, p. 34.

(22) Nat Hentoff, "Is there a New Radicalism?" *Partisan Review*, vol. XXVII, no. 2, Spring, 1965, p. 193.

(23) 右の論文が『パーティザン・レヴュー』誌における新しいラディカリズム議論の端初であり、また『ディセント』誌にはベルもしばしば論文を寄稿している。ハウ編『ラディカル・ペーパーズ』には彼の「労働、疎外、社会的統制」が収められている。したがつて、両誌の間には思想的な交流が行われているのであつて、まつたく孤立無縁の状態ではけつしてない。ハウ自身の言葉が示すように、「ディセントのわれわれの思想ムードに対するディセンターズも、彼らがわれわれと意見を異にするからという理由だけで排除されないであろう」（Howe, "Introduction," *Radical Papers*, p. 2）。

(24) Ibid., p. 12-14.

(25) Ibid., p. XIV.

(26) Bell, op. cit., p. 297.

(27) Dissent, vol. 1, no. 1, Winter, 1954, p 3. そしてつぎの八項目が列挙されている。

(一) 現代の諸問題に関する新鮮な、生き生きとした批判的意見を提示する。

(二) 順応主義の障害に対して知的感情を収斂する。

(三) デモクラシー的、ヒューマニズム的およびラディカルな諸価値を擁護する。

(四) ファシズムにせよスターリニズムにせよ、あらゆる形態の全体主義を攻撃する。

(五) リベラルな意見との率直かつ友誼的な対話に参加する。

(六) アメリカの文化生活についての研究を出版する。

(七) 政治および社会思想への学問的な貢献を促進する。

(八) 社会主義理論を討論し、再評価する。

(28) Bell, op. cit., pp. 297-298.

四

最初一九五四年の『パーティザン・レヴュー』誌に掲載されたアーヴィング・ハウの有名な論文 "This Age of Confor-

mity”は、一九六三年論文集 *A World More Attractive* に、そしてさらに今回の論文集 *Steady Work* にふたたび収録されている。彼はこれが是非読まれることを切望する。というのも第一にこの論文が、アメリカの知的生活のなかでもつとも不名誉な時期の批判的歴史に対するひとつの貢献であり、第二にそれは十年以前の闘争というものを、とくに歴史的な記憶に鋭敏でない若い世代に対して照明する手だてになろうからだ、と彼はその短いまえがきで記している。しかもこれは客観的ではなく、距離の冷静さも欠けているといわれる。確かにその通りであろう。そのテーマは明らかなように、現代アメリカの文学界にみられる画一化傾向、「順応主義へ向う一般的な思想的漂泊」[1]に対する痛烈骨を嚙むが如き批判である。

ハウにとつて「順応主義の荒涼とした雰囲気」とは、ボヘミヤ的世界の寂滅である。アメリカの知的生活のもつとも刺激的な時期はボヘミヤの上昇と一致する。かくも多くの知識人の間に見出される孤立感、自由主義的オプティミズムのイデオロギーを抉りとつた意気消沈した孤独感、それは部分的にはボヘミヤの崩壊に因つている。グリニッチ・ヴィレッジの栄華の廃墟をうち眺める彼には、かつての前衛たちが活躍した過去の面影がつきまとうているようだ。「アメリカのラディカリズムはひとつの思想としてのみ存在している、そしてかろうじてそれだけである。文学的前衛……は急速に崩壊しつつある。機能もせず精神も失つて。そしてそれは生気のない郷愁によつてだけつなぎ合わされるのだ」[2]。かくして、ハウにしたがえば、知識人というものは永遠に疎外されていなければならない。「権力と特権の源泉からのトータルな疎遠、われわれの文化の一切の側面を盲目的に不合理に拒否することでさえも、もしそれが攻撃の奔放な放出を可能とするのであれば、遙かに健全であろう」[3]。彼の表情には激怒がみなぎつている。

盲目的に不合理に拒否することは、盲目的に不合理に受容することよりは健全かも知れないが、それはインテリジェントではない[4]、とグレンヴィル・ヒックスが書いた後に、彼は如何にも苦々しく筆を投じたのではなかつたか。アーヴィング・ハウは確かにインテリジェントな作家ではない。ある箇所でみずから述べているように、「知的精神分析症という非難」に

自己を曝すことでも快く受ける。[5] それは現実そのものがパラドックスであるからなのだ。だが、彼は過ぎ去りしものへの追憶を慈しんだり、憂愁と倦怠を抱くようなロマンティックな人間ではけつしてない。現実に立ち向つて、思想の生命とともに闘争する「凄しい個人主義者」[6]である。「批判的独立性の旗印こそ、破れ引き裂かれようとも、依然としてわれわれの持つ最善のものだ」[7]という語気は烈しい。ともかくわれわれの世界は参加され、抵抗され、変革されねばならない。一体どのような未来へ向つてか？

二十世紀半ばにおいて社会主義者たることは、懐疑と再評価と危機とともに生きる能力、すべての真実なる現代人が生きなければならないように、問題的なもののスタイルによつて生きる能力を意味する、とハウは強調する。[8] この問題的なもののスタイルとはどのようなものであろう、まずこの点を明らかにしておこう。すでにみたように、新しいラディカルズは伝統的な社会主義理論、とりわけマルクス主義と離別している。彼らにとつては政治的マルクス主義——労働者階級の《革命的潜在力》、国家の《枯死》、《プロレタリアート独裁》といつた諸側面が崩壊してしまつたことは歴然としている。[9] ハウはマルクス主義に対して厳密な社会科学的タームで論じてはいないし、ましてや今日の《正統性》解釈をめぐる争点に触れているわけでもない。だが重要な相違点は、《科学的》という言葉の物神的使用、あるいは歴史の神格化を容赦なく拒絶する態度である。「……結局《歴史》はわれわれに何ものをも保障しないことを、われわれは知つている。すべてのものは今や人間の意志の問題なのだ。恐らく以上すべてのことを言いかえると、ユートピアの幻影とはひとつの真正な選択、深奥の必要性としてとどまつていると主張することである」。[10] それ故に、社会主義とはもはや歴史的必然性の問題ではない。社会主義とはわれわれの欲望の名だ。[11]

同様に、マルクス主義的な経済決定論に対してもきわめて批判的である。マルクスのオリジナルな衝動は真の人間的目標、人間性の人間化ということにあつたはずである。彼の経済的諸範疇も人間の社会的、そして実存的関係を解明すべきも

のであつた。こうしたヒューマニズム的側面を度外視して、「商品の物神性に計画の物神性を代置する」ような、ハウの言う「左翼の権威主義」傾向こそ、社会主義を堕落させ、その伝統的な息吹きを窒息させたものにほかならない。ハウの指摘するように、マルクスが生産力の増大を社会主義に不可欠な前提条件として語るとき、彼が思い浮べていたのは、少くとも西欧世界における資本主義の《普遍的発展》の姿であつて、それと同時に、ブルジョワ的工業化の過程で社会的意識が成長してゆくであろうという見透しを考えてさえいた。これはスターリン主義的工業化とはけつしてパラレルではない。全体主義的権力、官僚的中央集権による工業化の強制的な遂行は、体制如何を問わず、人間性を蹂躙する堪えがたき残忍さをともなう。工業化を社会主義的目標そのものとみなすスターリン的方法を、ハウは心底から憎む。[12]

さらに、問題的なもののスタイルは、最近のラディカルな運動、ハウのいわゆる《ニュー・レフティズム》のスタイルとも根本的に相違する。ニュー・レフティストたち、ハウにしたがえば、彼らはイデオローグとデスペラードの二範疇、それに人種的類別として白人と黒人がそれぞれ組み合わされている。学生運動、公民権運動、その他さまざまな激発は、アメリカ社会の欺瞞と空しさへの反抗という点で、すなわちアンティ・アメリカニズムという曖昧なイデオロギーにおいて共通の体験と問題をもつている。しかしながら、彼らはみずから否定しようとする諸価値との共棲関係に囚われていることを見逃しがちなのだ。また彼らの英雄的な、しばしば殉教者的な態度には、暴力への惑溺のほかに、政治的参加への積極性も、変革への希望や期待もまつたくみられない。「そのパラドックスは、彼らがしばしば政治にコミットしているとみずから誠実に思つている――しかし、社会革命のマルクス主義的期待からも同時に離れ去つているとはいえ、余りにも調子はずれの、かつトータルな社会の否認を主張する政治なので、際立つたパーソナルなスタイルの栄光もしくは重荷のほか彼らになにも委ねられていない、ということだ」。[13] かくして、労働者、ニグロ、学生、教会グループ、リベラル、知識人たちの“coalition” approach を実践的に提唱しながらも、ハウはニュー・レフティストのパーソナル・スタイルとの齟齬を認めざるを得な

い。

さて、「社会主義のイメージ」、あるいはその問題と課題とは如何なるものか、ここに提示されたものは、冴え返つた批判の銃鋒に較べると、イメージとして鮮やかではない。まずそれは、全体主義的、権威主義的なリヴァイアサン——現代の福祉国家はテロリズムをともなわずにそのような傾向性へと輻輳しつつある——に対する抵抗である。その抵抗となるものは多数の政治的・経済的ユニット、つまり機能的集団の存在である。社会主義的理念とは第一に友愛、平等、自由のデモクラシー的諸価値へのコミットメント、第二に生産手段の重要部分がデモクラシー的に管理されるような未来社会へのコミットメントである。これらの緊張関係を宥和するものが機能的集団のデモクラシー的な参加にほかならない。かくして、集産主義的経済体制内における自律的、かつ多元的な社会諸制度のための構想を発展させることが最大な課題となるであろう。

ハウが繰り返して明記していることは、新しいラディカルズにとつてひとつの主要なテーマは「デモクラシー的諸価値の明確化」[14]であり、「ラディカルな政治がアメリカ社会に深い永続的なインパクトをつねにあたえるためには、それはデモクラシー的諸価値に根差さねばならず、デモクラシー的手続きにコミットされねばならない」[15]ということである。いささか陳腐な表現である。以上のようなハウの社会主義は、《修正主義》あるいは《フェビアニズム》にもつとも似通つているであろう。[16]けれども主義の名などどちらでもよい。少なくとも現在のところ、ハウにとつては社会主義に定義をくだすことが問題ではないのだから。「今や、われわれは敗北の影のなかに生きているとき、社会主義のイメージをとどめ、意志することは定義のための絶えざる闘争であり、ほとんど苦痛の行為である。しかしそれは創造を可能ならしめる苦痛である」[17]という言葉がこれを物語つていよう。まさに問題的なもののスタイルとして生きることである。それ故に、ここでは問題の問題たるゆえんが感じられているだけで、その解決はできないのだ。

(1) Howe, *Steady Work*, p. 330.

(2) *Ibid.*, p. 341.
(3) *Ibid.*, p. 322.
(4) Hicks, op. cit., p. 296.
(5) Howe, *Steady Work*, p. 296.
(6) Howe, "Introduction," *Radical Papers*, p. 1.
(7) Howe, *Steady Work*, p. 345.
(8) *Ibid.*, p. xiii.
(9) しかしながら、「われわれはつぎのことを承認しなければならない、すなわちマルクス主義的遺産は、われわれの思想というものをわれわれが知っているより以上の方法で疑いもなく形成しており、依然として強力なものとしてとどまっていること、そしてマルクス主義的方法は、とりわけそれが最少限度の自己意識をもってさらに大きな思想スタイルへと吸収されるようになれば、政治的論争の争点を先鋭化するに当って未だに価値あるものたり得るということである」(*Ibid.*, p. 5) と言われる。マルクス主義はその結果において誤っていたとしても、その方法は妥当性をもつという議論はよくなされているが、右のハウの表現はあまり明晰ではない。さらにハウは、マルクスの《疎外》概念はマルクス主義理論のなかでもっとも重要なものであって、それは今日においても不可欠である、と主張する (*Ibid.*, p. 202)。そして労働の本質の問題、余暇の問題は、たとえ社会主義社会になっても残るであろうし、いわゆる《大衆文化》の問題に関してはマルクスの知らざるところだ、と述べている。
(10) *Ibid.*, p. 33.
(11) *Ibid.*, p. 272.
(12) 彼のつぎの言葉を引用しておこう、「ディケンスの如きは現在のロシアのために、そしてそれに対して何をなすであろうか、を想像だけしてみよ！　現在のロシアにディケンスの如き存在の如何なる可能性も欠如していることこそ、ブルジョワ社会とスターリン主義的社会における工業化過程の間の類比が如何に誤っており、安易なものであるかを示唆している」(*Ibid.*,p. 308)。かくして、孤立なプロメテウスであったトロツキーが、スターリン的方法とどのように相容れぬものであったか、またパステルナークのうちに「トータルな国家に対する人間の《永久革命》を表象する」人間的形姿が偲ばれる。つぎのハウの論説を参照。"Leon Trotsky: The Cost of History," *Ibid.*, pp. 117-155. "Pasternak," *ibid.*, pp. 156-169.
(13) *Ibid.*, pp. 43-44.
(14) *Ibid.*, p. 35.
(15) *Ibid.*, p. 90.

(16) 事実、彼はR・クロスマンやL・コラコウスキーなどを引用している。「ラディカリズムとは純粋性や廉直さの量でも尺度でもない。それはひとつの政治的立場だ。そしてもしフェビアニズムの大まかな採択がひとつの可能性であれば、われわれはそれを把えねばならない」(*Ibid.*, p. 16)、あるいは「東欧における《修正主義的》知識人たちの出現にわれわれの悦びを宣言する……」(*Ibid.*, p. 35) といったところからもこのことは明白である。

(17) *Ibid.*, p. 295.

五

Nur um der Hoffnungslosen willen ist uns die Hoffnung gegeben

われわれに希望があたえられるのはまさに希望喪失せるものであるがためだ[1]

これは美しいレトリックである。それ故に一種の空しさを感じさせはしないか。ラディカリズムとは美しく着飾つた衣裳にすぎないのか。「……絢爛たるラディカリズムは中身のない貝殻となるだけだ[2]」という言葉はいささか皮肉である。すでにみたように、新しいラディカリズムをめぐる論争は一九六〇年代半ばに開示されたばかりであるが、『ディセント』誌は十二年にわたる過去をもち、今やみずからを説明し、「ディセントの伝統」を語るほどにさえなつている[3]。これをひとつのイデオロギーの復活と言い得るかどうかは遽かに判断し難いところであるが[4]、今日それはたんなるレトリックやトータルな疎遠に奇を衒つているのではなく、「トータルな疎遠の不毛性を回避しながら、批判の構えを保つ[5]」ことを十分に自覚している。ともかくラディカルズの知識人としての創造的役割は、現実にどれ程の影響力をあたえてゆくか、今後の試練に堪えなければならない。

シドニー・フックの言葉を引用しておこう。「アメリカ知識人の社会的機能は、彼の思考の結果がわれわれの時代の重大問題に関係をもたらすような方法で思考し、行為することである。思想生活の根本的な属性——その固有な徳性——とは、

識別する能力、適切なる区別をなす能力である。アメリカについて彼がインテリジェントに評価する場合ショーヴィニスティックでないと同様に、インテリジェントに批判的である場合には彼は非アメリカ的ではない。アメリカの知識人たちは、デモクラシー的福祉国家を求める社会的風土と客観的可能性とが過去二十年間に進歩してきた程度というものに気付いていない」。[6] ラディカルズはこのようなことに恐らく眉をひそめるであろう。批判および拒否は、疑いもなく政治行動の重要な武器である。しかしながら、銘記すべきことは、ウィリアム・ニューマンが指摘している如く、巨大な複雑化した産業社会の問題に対して、リベラル（＝ラディカル）な知識人の態度はつねに政治の拒否に陥つて、「苦しげな敗北感」に取り残されていることだ。[7] 三〇年代このかた知識人がたどつてきた運命の轍とはまさにそれであつたことを、六〇年代のラディカルズは忘れてはならない。そしてその扮装せる思想が悲しき幻影であつたということも。

ふたたび、ハウはカッシーラーのつぎの美しい言葉を引いている。

> ユートピアは現実の世界の像ではないし、現実の政治的または社会的秩序の像でもない。それは、時間のどんな瞬間にも存在せず、空間のどの点にも存在しない。それは「どこにもない」のである。しかし、このような「どこにもない」という考えが、テストにたえたわけであり、近代社会の発展において、その力を証明したのである。倫理的思想が決して「与えられたもの」を受取ることを肯んじないということは、その本来の性質と特徴からきている。倫理的世界は、決して与えられるものではない。それはつねに作られつつある。[8]

まさにその通りである。こうした態度が真のラディカリズムであろうが、しかし現代のわれわれはそれを肯定しつつも、それ程にオプティミスティックたり得ないことに問題があろう。むしろ近代社会におけるユートピア思想の自己破壊、あるいは自己敗北のゆえに、懐疑的なディスタンスをとらざるを得ないこと――そしてそれこそ「ユートピアの死滅」を、「イデオロギーの終焉」を告げる人びとの真摯な態度でもあるのだが――われわれはまさにこのところからユートピア構想、新しいラディカリズムを出発させねばならないことは言うまでもない。[9] それは多難な無限に繰り返されるシジフォス的課題、

ハウの言うように、「辛抱強い仕事」であろう。

(1) Herbert Marcuse, *One Dimensional Man: Studies in the Ideology of Advanced Industrial Society*, Boston, Beacon Press, 1964, p. 257. から引用。ウォルター・ベンヤミンのこの言葉は、むろんマルクーゼ自身の思想をあらわしたものである。

(2) Bell, *op. cit.*, p. 298. ラディカルな知識人タイプにもつとも批判的であるウィンストン・ホワイトはつぎの如く指摘する。「さらに重要なことは、……彼らがディセントすることを選択するという事実なのではなく、ディセントのため根拠として適切な問題を見出しえないという事実である」(Winston Whyte, *Beyond Conformity*, The Free Press of Glencoe, Ill., 1966, p. 210)。

(3) Michael Harrington, "The Tradition of Dissent," *Dissent*, November-December, 1961, pp. 627-628 and pp. 749-752.

(4) この点で、ステフェン・ルーシーズの見解はラディカリズム復活に対して懐疑的である。Stephen Rousseas, "The New Radicalism: Round II," *Partisan Review*, vol. XXXII, no. 3, Summer, 1965, pp. 346-357.

(5) Howe, *Steady Work*, p. 13.

(6) Sidney Hook, "From Alienation to Critical Integrity: The Vocation of the American Intellectuals," de Huzar, *op. cit.*, p. 531.

(7) William Newman, *Liberalism and the Retreat from Politics* New York, George Braziller, 1964, p. 129.

(8) Howe, *Steady Work*, p. 295 に引用されたもの。E・カッシーラー『人間』(岩波書店) 宮城音弥訳、八五頁。

(9) シュクラール、前掲書、二七五—二七八頁。